



ESHIMA KISEKI
4 vol. A 220.

入 繪 30

忠信太事記

三

~13
4286
3





忠臣界大平記

卷三目録

極樂のつら巻 昇天竺 寧人

若の徳ね拍みよのりてまゝいさ
がら重し世海りのせりなまゝ息
杖つらつあつたつていさ

勇士の智謀 傾城れ手工多

をのたふくしうららわの神ふもむ
あつ神いふらうら 傾城れそむ 賢者の
あつたつていさ



女郎に逢て物言ひもと鏡の涙

周の東の野原まうさうり 色四命

と英月もさうさめ男たぐれこの

仲お産のさうり者

お徳をたね夜朝血の日記者

南産実の味増地うさう世帯

支ぬわいさ井戸の物籠焼くらて

とくらぬ徳のつん

極糸のくさうさへ天竺軍人

難波の呉服店を子代は返るせまき方の船の東船あり

町よ系隠居してさうのぢりたけり物さ蓄代の下人

人ついで暇よ大坂を出て歩沙汰のぢり小系橋より伏

見さ所徳が籠籠よのりゆくに物さうさ申食さうめ

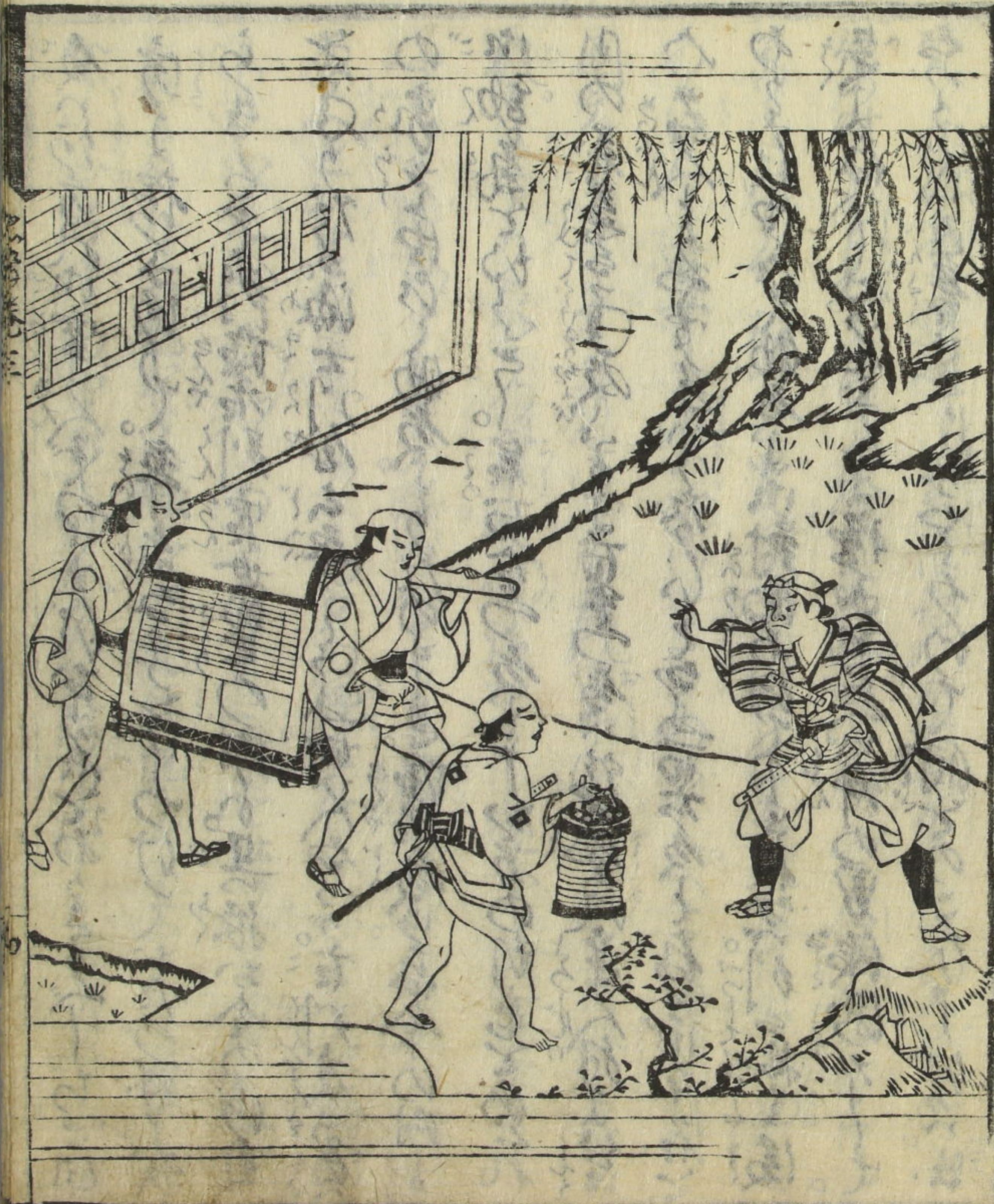
又さより智徳整て糸のゆくにさうく暇りさうん

なれへ目えよ手鞆おしお姥さうさうの徳府の者息

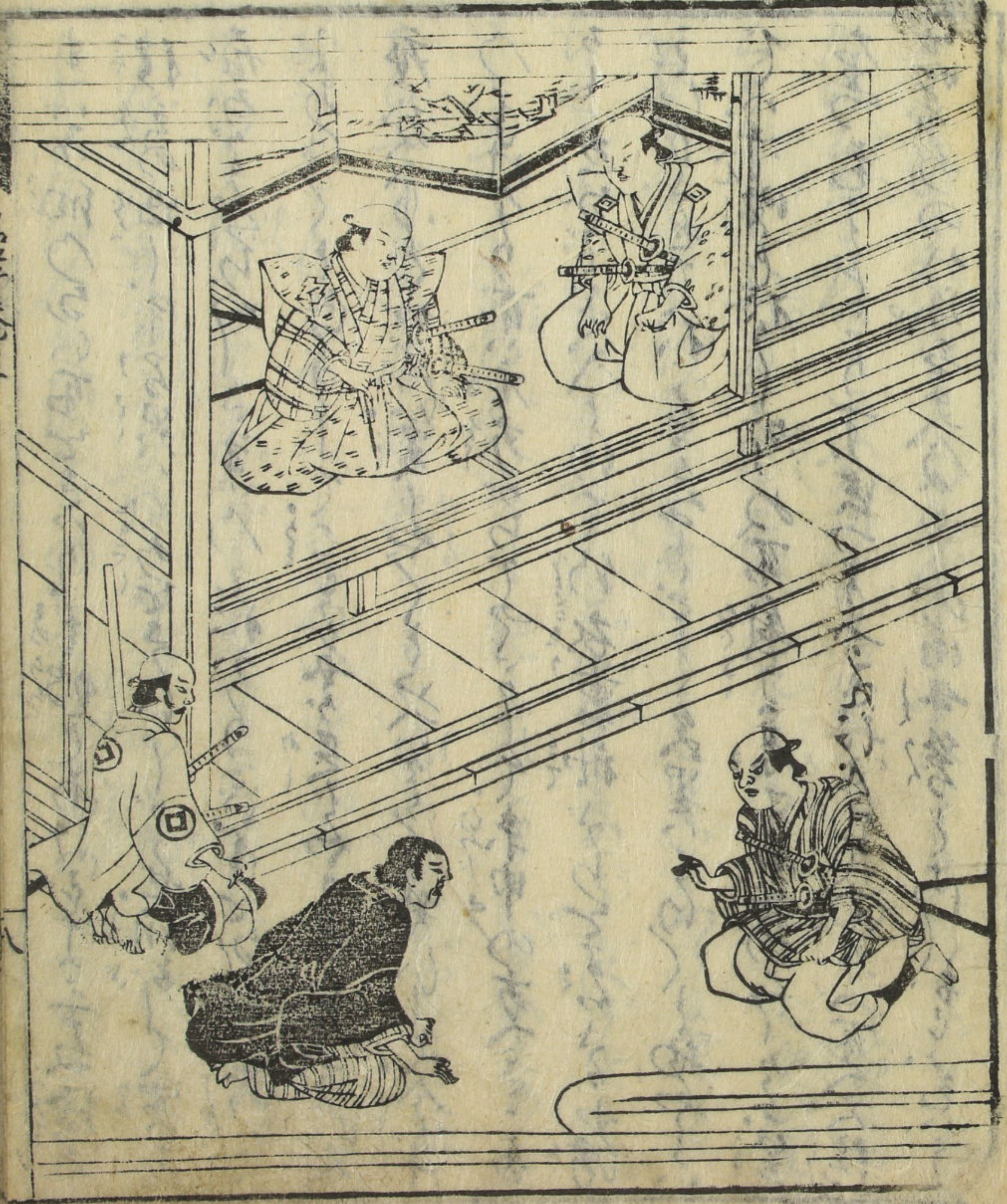
杖をたかて休むさうさうの徳さうさう又今日とお相

子かろ長ねどのせでさうさうのぢりさうさうさうさう

耳にかりてそれの我れが強の事うぢりさうさう下かり一流

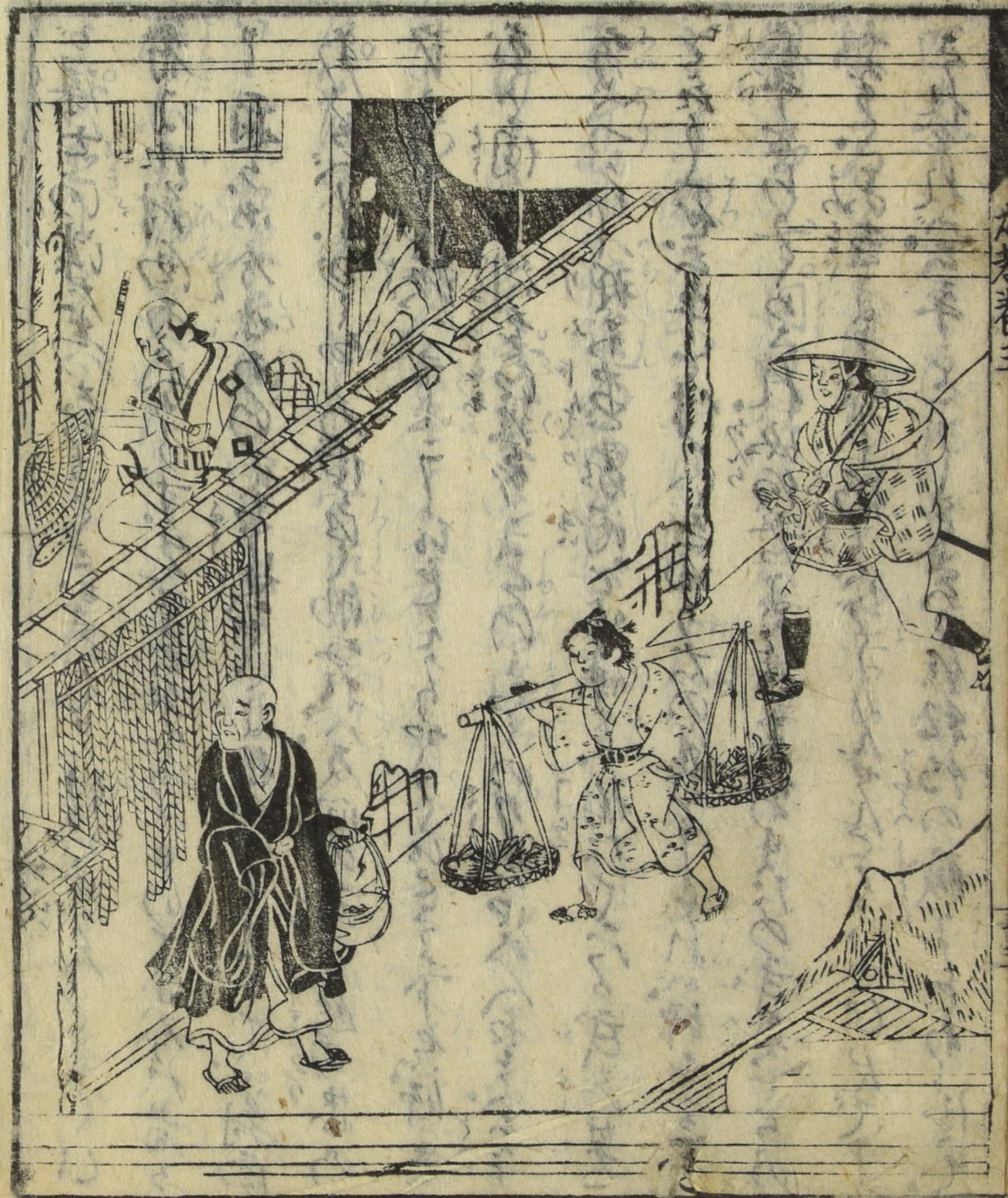
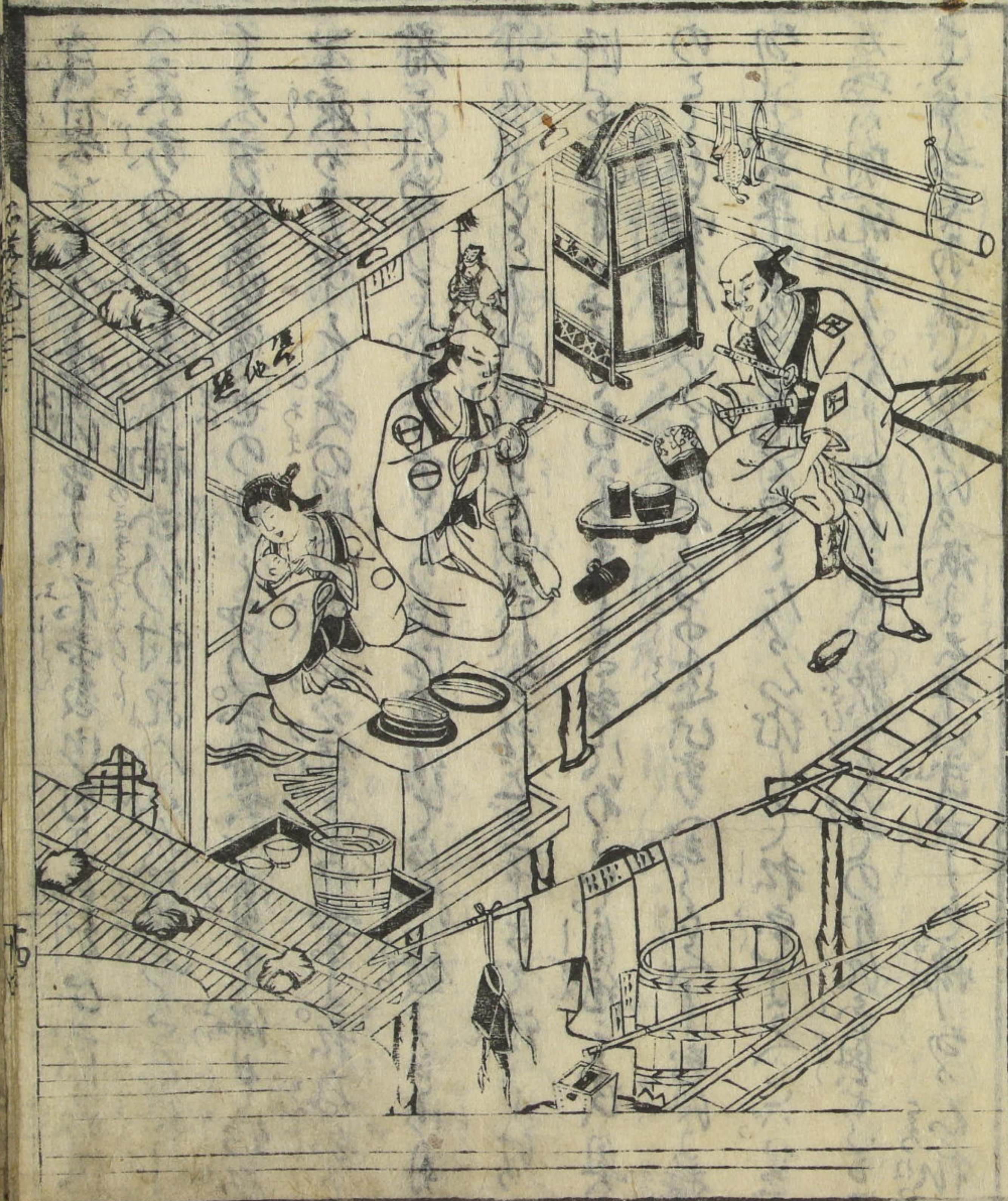


わしとていふありしにあそびせり座の表筋方へ来
 じ。惱むらよやごと毎日同くま物の手と忌羽二重の巻
 まらひとり。白紋と赤く本陣足袋もふたぐ一皮でと
 襦のそれをもふさぐつととまらしてせらふ靴文どりのた
 やら時純終の丸づけとねとろくろとと常座も大方くんづて
 わつらぐ大橋のよけてねの隙のやあつとつけ進て
 と。爰にふ居るふせめて大橋のあつげぬを足ぬ事いあつ
 まどとひまのめあふでとあふととらさうれく。あつてあ
 酒のよあせはまきとあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 せんさくあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 ろめとてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 盃まの



も来るといふに同くそのかたは方へこそせはしと先
とこねると首をたんと氷のどくどく力であつて月影よ
ひらめくを去来とくれば若く大悔日と神唱の病と死
して髪を捨て髪中をとりうらよ迎へてゆく。この
らと進うらうらとく先このまをより大橋のまを
あつたつとく人の子ふとふ事ふふとを念ひつゝ二命
よ替へて今来集れたまひつゝく自はくせし道二世と
一和の心を今とてとくうらわしとくたをあげて月
影よ来るといふに同く大悔日と神唱の病と死とあつて。
先をたんと通うれば人の子ふとふ事ふふとを念ひつゝ二命
よ替へて今来集れたまひつゝく自はくせし道二世と
一和の心を今とてとくうらわしとくたをあげて月

助ぐらにたをわく連判物と裁りたる事。是とくも
悔しとくも存へて秘苑と存へて大徳寺の集り
付てあま川を去平方へ今おろや川とせ成の中のもの
而を相見つゝとるるがりにいひかたのゆゑにありか
見してつゝとるるがりにいひかたのゆゑにありか
合。此の義へ集りたる。今後にはいひかたのゆゑにありか
事。此の義へ集りたる。今後にはいひかたのゆゑにありか
美。此の義へ集りたる。今後にはいひかたのゆゑにありか
を。此の義へ集りたる。今後にはいひかたのゆゑにありか
所。此の義へ集りたる。今後にはいひかたのゆゑにありか
一。此の義へ集りたる。今後にはいひかたのゆゑにありか



武具と多く蓄は申し不審は包よ別は武具は
へ文方の抄堂を捕正討死の仕度場つらん
て大方の家道世の身と守り。武具と賣て佛を修め
と求り申して天の川の眞契若しよ不し私存知
者これありて。是が方よりは實法は御殿より
よはり。とてこれか指とテ申さぞ練つけ。
御堂御堂と申して是のままだ事にあはれ。自他と武具
のらんど實んといふ言のわらふの迷ひ方あると
切し。去年の虎の毛とあきたらん此し私宅より
なすの胡亂なる義申す。我を欺くは此の如く
てとふくあててゆりけり。法よ去年は武士と
しとて掃けり。

是義を守り紛を愛せぬ守り約言をてし
を知らぬぞ。人只別賢を獨賤花申言者不
しとて結のらんとし。

お信庵の長履朝顔の日記と云

秋小はく体見の里海乃糸の糸の
秋の物あるは。近松よ候より朝魚の目
赤意よりありけり。隣よかよの火打石
へりまのび。ちちちとて。海より見
賣りやちち。紙物の破り入りて。食
の飯をうらみて。追まらぬ。二布の
かき

火のりしむて。是れ一々の此まといふ。由は
り多の叔母今、中事余の事ありと。先自去来、
信守り候。ぬらん。神妙なるあり。如神の通りも
よ。どか。文をな。き。と。ま。え。の。事。吉。列。官。後。少。勤。
ぬの。由。事。られ。我。が。中。と。し。て。は。夜。の。事。三。の。人。教。の。中。へ
さ。う。の。中。を。急。に。な。し。候。出。る。事。あり。て。我。の。私
ゆ。て。省。す。と。れ。り。也。下。れ。ま。す。叔。母。事。話。の。由。事。な。れ
終。り。ま。す。け。出。り。善。は。推。し。し。と。余。候。と。あ。り。と。な。れ。り。而
右。の。事。て。油。は。某。の。不。審。の。事。し。て。は。へ。者。の。由。入。り。て
人。教。の。中。へ。お。加。へ。ら。ぬ。事。へ。是。よ。あ。り。り。他。へ。人。教
よ。入。ら。と。他。言。は。ら。ぬ。候。事。あり。也。此。の。事。念。ふ。に。あ。り。り

ゆ。て。幸。て。肉。を。あ。れ。け。り。一。つ。勝。を。お。か。し。只。今。も
よ。切。後。と。は。ら。由。苦。勞。が。ら。ぬ。介。指。教。入。ら。と。力。を。あ。り。て
申。お。し。後。よ。う。た。た。ん。と。せ。し。事。候。事。あり。り。乳。飲。む。事
と。て。い。は。れ。り。事。あり。り。わ。と。う。つ。い。て。お。じ。い。は。り。助。の
さ。う。と。せ。り。と。せ。ば。一。つ。け。り。は。後。切。後。と。せ。り。が。事。に
お。れ。り。と。い。は。れ。り。事。あり。り。と。あ。り。り。と。あ。り。り。と。事。あり。り。我
く。が。私。の。事。を。あ。り。り。と。い。は。れ。り。人。教。よ。入。り。と。れ。り。や。と。い。は。れ。り。眞
途。と。し。て。由。事。と。う。り。終。り。た。ぬ。よ。お。果。ん。と。の。事。あり。り。某。と
ゆ。り。は。私。と。し。て。あ。り。り。と。い。は。れ。り。化。粧。あり。り。由。切。後。と。は。ら。と。い
あ。り。り。と。い。は。れ。り。と。い。は。れ。り。と。い。は。れ。り。と。い。は。れ。り。人。教。よ。入。り。と。れ。り。と
の。迷。信。不。足。と。い。は。れ。り。類。あり。り。に。は。ら。後。と。し。て。人。教。よ。入

どつ他をいはやくの西遊とあせりあるが、これ夫は身
あつとどつとをいふ人をもつてすまこといふもたの大
まといふ小徳意をいふまといふに才にあり子に親とあつと
であつとわあれは早余人の大勢のほつれつとつと
くまつとわあれは早余人の大勢のほつれつとつと
せんは活定なり。彼田舎先生は、慈丹よつとつとつと
けりつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
いて、慈丹が帝に死つとつとつとつとつとつとつとつと
固あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
を、ゆは、助国奉てあつとつとつとつとつとつとつとつと
の、ま、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

太
30

は、あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
の、ま、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
た、あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
い、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
ら、あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
あ、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
い、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
し、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
家、あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
と、つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
脚、あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

ありては、^{いん}身を^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
いかに^{いん}なれば、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
ゆゑに^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は
く^{いん}は、^{いん}心も^{いん}離れ、^{いん}心も^{いん}のづら。亡き人の^{いん}魂は

忠臣蔵大車記卷之三 終

